

第10回海岸工学国際会議を終えて

—その経過と成果—

本 間 仁*

国際会議といってもいろいろな性格のものがあるが、われわれが関係するのは、多くは学術講演会を中心としたものである。海岸工学会議もやはりそのような性格のものであり、この種の会議を日本に招致することの意義は、やはり知識の交換による国内の学界への刺激と、日本の学問、技術の海外への紹介が主なものであろう。

日本の海岸工学はわずか10年余の歴史を持つに過ぎないが、海岸に関する多くの問題を持っていることから、研究面でも技術面でも急激に伸びていて、国際会議を招致する下地は十分にあったために、比較的順調に日本での会議開催が決まることになったといえる。

第10回海岸工学国際会議を日本で開くことが正式に決まったのは1964年夏のリスポンでの会議の折であり、その準備を始めるに当たって、われわれがまず考えたのは、やはり近く日本に招致の予定を持っている国際水理学会(I.A.H.R.)総会との関連についてである。海岸工学会議の出席者の中にはかなりの数のI.A.H.R.会員が含まれるであろうことを考えると、二つの会議を同時に日本で開くことも当然考慮されるべきことである。この問題については多くの人の意見を集めて検討した結果、まず海岸工学会議を1966年に開き、I.A.H.R.の会議は1969年を予定することになった。これはI.A.H.R.会議が規模も大きく、同時通訳を必要とする点等から、その準備を考えれば最も無理のない案であったと思う。

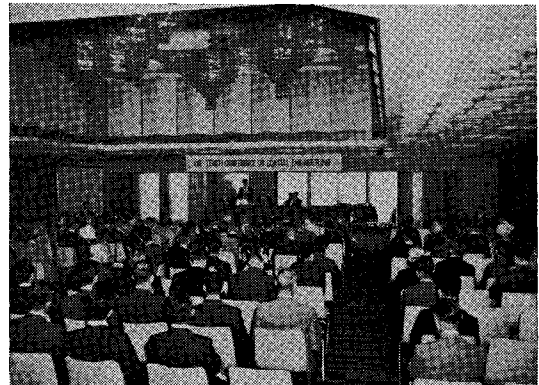
海岸工学会議のための組織委員会は、土木学会の海岸工学委員会を中心として1965年1月に発足し、事務局を東京大学工学部の筆者の室に置き、有志の間で約50万円を集めて当分の運営費とした。委員会の最初の仕事は国際会議主催者の決定であった。従来この会議はアメリカ合衆国の波浪研究会(Council on Wave Research)が主催し、開催地の組織委員会が運営する形態をとってきた。しかし、最近、波浪研究会が経済的な理由からアメリカ土木学会(A.S.C.E.)の中に入って、海岸工学研究評議会(Coastal Engineering Research Council)と

なったために、その国際性が云々されるようになった。一方において、I.A.H.R.の中の海岸水理委員会との関係も議論されている情勢であったので、今回は日本の土木学会、A.S.C.E.、I.A.H.R.の3者共催の形をとることとし、土木学会理事会の承認を得るとともに、I.A.H.R.会長 Escande 教授、海岸工学研究評議会 Johnson 教授等の了承を得た。会議の準備と運営は組織委員会が当り、論文集はA.S.C.E.が印刷刊行することになった。

つぎの仕事は、予算の作成、募金の準備、会議前のサーキュラー等諸資料の作成と発送である。予算は初め700万円程度を考えたが、何度かの変更を経て1000万円とした。免税による募金の申請は頭初土木学会からとしていたが、大蔵省よりの指示により、学術振興会に経理を委託することになった。しかし実際には会議終了までの支出は約900万円であった。収入の面では会員の参加費は総計約260万円、広告料等が約40万円で、他は寄付金である。

海岸工学会議は国際組織が不完全であるために、サーキュラーは普通の場合よりも多く、3回発送したが、その他にもI.A.H.R.の機関紙および土木学会誌上で予告を行なった。会議前に発行した資料としては、まず日本の海岸工学の現状を説明するガイドブックとして“Outline of Coastal Engineering in Japan”を編集し、

開 会 式 (昭和41年9月5日)



* 正会員 工博 組織委員長

1966年7月に出席予定者全員に発送した。さらに申込みのあった約130編4頁の論文概要を集めたDetailed Summariesを編集し、これも会議当日までに全出席者に配布した。これらの印刷物は、会議を内容のあるものにするためにきわめて重要なものであったと思う。このような印刷物を編集する上での一つの問題点は、国内から集まった原稿の英語の査読である。国内研究者の英語学力は、年とともに進歩しつつあることは疑いないが、現状ではまだこれが組織委員会にとっての大きな負担になっていることは事実である。

組織委員会事務局にとっての今一つの大きな仕事は、出席予定者一人一人との個人的連絡である。出席者はそれぞれに国情からくる手続きの面倒さ、個人的な事情や特別な希望があり、事務局ではできる限り一人一人の希望に添えるように配慮することを努めた。そのために会議前に発送した手紙、電報の数はかなりのものであった。

会議場については、最初は箱根の芦の湖畔あたりを考えていたが、参加者が200名を越える予想が出てから、予定を東京に変更し、東京プリンスホテルに大体の予約を行なった。その後、同じ会場で電気化学の国際会議が開かれるという問題があって、多少の面倒はあったが幸いにして順調に諸準備が進んだ。

会議に当っては、多くの人達の援助を得て、諸事プログラム通り進んで、その後の見学旅行についても大した事故もなく、すべて完了したことは誠に幸いなことであった。

会議後に多くの人達からお礼やお祝いの言葉とか手紙をいただいたが、私からもこの会議のための準備、運

開会式であいさつする筆者



営、募金業務、見学旅行等でいろいろとお骨りをいただいた方々に、心よりお礼を申述べたい。

会議そのものについては後から考えれば、こうしておきたかったということも多く、外国からの出席者にしても、まだきて貰いたかった人でこれなかった人数も少なくない。しかし今回の海岸工学会議は第一歩である。会期中に開かれた海岸工学研究評議会の集りの際に、今後はなるべく海岸工学についての background のある国で国際会議を開くようにしようということが話し合われた。そのように考えると10年か15年後には再び日本で海岸工学会議が開かれる可能性もあろう。また、それほど遠くない将来でも、数年後にはI.A.H.R.の総会が日本で開かれることになろう。その際は、海岸工学に関係のある部会も恐らくは含まれるであろうと思われる。わが国の海岸工学が、このような機会に一層の前進を見せることを期待している。

1966年水工学シリーズ

A. ダム・河川コース B 5判 220 ページ 定価：1 200 円（〒100 円）

内 容：河川の不安定流について／林 泰造■流 砂／椿 東一郎■河川の蛇行について／井口昌平■ダム洪水吐の水理設計／安芸周一■粘性流体（血液流動と Crouting の水理）／伊藤 剛■河道設計法／土屋昭彦 ■河川の乱流現象／日野幹雄■水資源計画論／西川 喬■河川流出に関する諸問題／石原安雄■地下密度流／嶋 祐之■

B. 海岸・港湾コース B 5判 232 ページ 定価：1 300 円（〒100 円）

内 容：高潮問題／篠原謹爾■河口処理について／富永康照■津 波／梶浦欣二郎■港湾工作物の水理的諸問題／伊藤喜行■海岸施設に関する2,3の問題について／渡部弥作■密度流の諸問題／岩崎敏夫■海岸侵食論／岩垣雄一■波圧論／永井荘七郎■漂 砂／佐藤昭二

申込先：東京都新宿区四谷1丁目 土木学会へ